



自分の命は自分で守り、 災害から生き抜く知恵を育む 防災キャンプの取組み



新潟県新発田市教育委員会生涯学習課
課長 土田 道代

1 新発田市の概要

新発田市は、県都新潟市に隣接する人口約9万人の都市で、かつては城下町として栄え、国の重要文化財となっている新発田城などの文化遺産を現在もまちの随所にとどめています。美人の湯で知られる月岡温泉、山から海までの豊かな自然など、たくさんの魅力を持つ新発田市は、「住みよいまち日本一 健康田園文化都市・しばた」を将来都市像に掲げ、まちづくりを進めています。

2 防災キャンプ実施に至った背景

新潟県では新潟県中越地震（平成16年）、新潟県中越沖地震（平成19年）の大災害を契機として地域ぐるみの防災教育の必要性が高まり、平成26年には新潟県防災教育プログラムが作成されました。

当市においても櫛形山脈断層帯という今後30年の間に大きな地震が発生する可能性が高い活断層があることから、自然災害がいつ起きてもおかしくない状況にあり、防災教育は重要な課題となっていました。また、少子化の影響で閉校となった建物の有効活用と地域の活性化も課題となっていました。

3 取組みの内容

閉校した校舎をリニューアルした青少年宿泊施設「あかたにの家」を防災教育の拠点として活用し、平成29年度から新潟県の

防災教育プログラムの作成に携わった大学・NPO等との連携・協働により、市内全小学校が体験型の防災キャンプを実施しています。

防災キャンプの目的は、災害から命を守るために体験活動を通じて、「自分で判断して行動」、「協力・助け合い・ゆずり合い」の大切さを育んでもらうことです。

令和6年度からは就学前の園児と保護者を対象とした「親子防災キャンプ」や生涯学習課主催による家族向けの「ぼうさいファミリーキャンプ」をスタートし、また市外向けに防災キャンプを活動プログラムの主軸としたPRチラシを作成するなど、事業のすそ野の拡大を図っています。

防災教育プログラムにもとづく防災教育が確実に行われるよう、当市では、全小学校が継続して取り組める仕組みづくりとして、生涯学習課に防災キャンプをサポートするためのコーディネーターを1名配置し、毎年4月には防災キャンプを担当する



青少年宿泊施設「あかたにの家」



避難所設営体験



活動事例集など

教員を対象にした事前研修会を実施しています。研修会では、防災キャンプのプログラムづくりのポイントや体験学習の意義・効果等に関する座学に加え、実際に段ボールを用いた避難所設営等の活動を行う時間も設けています。

また、各校のプログラムの相談に応じるとともに、各校が実施した防災キャンプの内容をまとめた報告書や活動事例集・NPO等外部指導者リスト等を毎年度作成して配布しています。このようなプログラムづくりの支援も、継続実施を可能にする大きな支えとなっています。

さらに、新潟県防災教育プログラムの作成に携わった群馬大学と協働して市内モデル校が「得た知識をもとに考え、実践し、検証する（ふりかえる）」ことを重視したプログラムを実践しています。その成果を検証し、他の学校に還元する仕組みも構築しています。

4 取組みの成果

防災キャンプを通して、多くの児童が、他者を思いやる、助け合う、自分で考えて行動するといった面で、自らの成長を実感するとともに、防災キャンプ前後で友達同士の助け合い行動が増えたことが確認されています（群馬大学調査）。

また、市内全小学校が学校独自の防災教育プランを作成し、防災キャンプを教育課程に位置付け、平成29年から8年間継続して実践しています。

さらに、閉校となった建物の活用による地域の活性化やスタディーツリズム事業のコンテンツとして、都市部との交流人口増を推進する「まちづくり事業」へと発展しています。

5 おわりに

市内全小学校が防災キャンプを継続していくためには、学校の現状を踏まえてサポート体制を常に見直していくことが必要だと考えています。

また、新発田市の防災キャンプは、「防災を学ぶ」から「防災で学ぶ」への質的転換を図っています。災害から命を守り、生き抜いていくためには、防災に関する知識や技能を習得するだけでなく、それを生かすことが大事であると考え、災害時に、自分で判断し、進んで行動し、誰とでも協力する能力や姿勢を育むことを大切にしています。防災を学ぶだけではなく、防災を通じて日頃の生活に必要な素養を身につける。そのような防災教育を今後も推進していきたいと思えます。